

の密度や、其他生産に影響を與へるあらゆる自然的條件も、同じく生産に對して第一要求權を持つと云はなければならぬ。習慣上曖昧に用ゐられて居る言句は、程なく何等の意味をも持たなくなつてしまふものである。労働は商品であるといふことを忘れない以上、賃銀は生産上第一費目だと云ふことを云つたりするのは、全く無意味である。若し左様云へるならば、同じ意味に於て、石炭の價格は生産上第一費目であるとも、又鞆皮は、動力に對する第一費目だとも云ふことが出来る筈である。第一要求權といふ言葉は、保障を意味して居るものであるが、此保障なるものゝ實質は、生産を其總ての過程に於て、且つ分配を其總ての状態に於て管理する所の力である。労働者は、生産に就ても分配に就ても、全然何等の力をも有しない、何故ならば、此力は労働を賃銀と交換した利那に、労働者から他人へ引渡されてしまふのであるから。綿糸製造家は、綿糸貨物を生産する前に、先づ綿糸を入手しなければならぬ。然しながら何人か、綿糸は綿糸業に對して第一要求權を有することを夢想し得よう。言葉を書義通りの意味に解すれば、綿糸の價格は正に『第一費目』であるに相異なる。が『第一費目』なる言葉の普通に用ゐられて居る意味から云へば、斯様な用の方は無意味でもあれば馬鹿げて居るし、又危険でもある。賃銀が生産其他何物に對しても第一費目を構成して居ないと云ふ究極の、動かすべからざる證據としては、失業者即ち労働の豫備軍は、現在の生産組織に取つて必要なものであるに拘らず、其生活を維持する爲めに、生産上絶対の何等の要求をも有せず『第一要求權』をも持つて居ないことを擧げることが出来る。然も我々の知る所に依れば、失業者の生活維持は、現従業員の生活維持に次ぐ重大問題である。

賃銀制度は、勞力の持主に對して、第一、第二、第三等凡ての生産上の要求權を一切拒否するものである。然しながら、若し我々が労働に對して、其本來の人間の屬性を認め、之を純粹の商品視する説を一擲して、労働の經濟的職分に關する通俗の觀念を變更するならば、それは取も直さず、我々が労働を賃銀又は其生物の範疇より引離して、地代、利子、利潤の如き有生の、又は活動物の範疇に移すことゝなるのである。此思想上の變化にして一旦遂行せられたならば、之で吾々は政治經濟學に革命を起したことになるのである。茲に至つて極めて労働は、地代、利子、及び利潤と相對して、生産に對する『第一要求權』を争ふ地位に置かれるのである。労働者が果して事實の上に於て第一要求權を獲得し得るや否やは、一に其の經濟的團體組織の力——即ち生産及び分配のギルドを構成する力と意思とに依つて決定せられる。而して商品に非ずして人間の努力を意味する所の（労働の持主が、斯様に鞏固な經濟的基礎の上に團結と組織を形成し得るや否やに依て、生ける原則としてのデモクレーシーの適不適が證明されるのである。吾人の信するが如く、労働者が若し有力な團結組織を形成し得、貨物の生産と交換とが賃銀制度の下に於けるよりも有效に行はるゝに至つた暁には、現在の制度の下に於ては、賃銀労働者が生産上何等の要求權をも持たないに引換へてギルドの中に團結した労働者は、單に生産のみならず、生産組織全體に對して、第一、第二、第三要求權を持つに至るであらう。

經濟的團結は、經濟的資源に劣らぬ大問題である。自然的資源には富みながら、團體組織に於て缺くる所ある社會は、自然的資源には乏しくとも、經濟的目的の爲めに有效に組織せられて居る社